

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	中国と日本における隠遁思想：陶淵明と西行
Author(s)	蘇, 夢
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 19期: 87 - 112
Issue Date	2005-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038849">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038849</a>
Right	
Relation	



# 中国と日本における隠遁思想 —陶淵明と西行—

蘇夢

- 一、研究の動機
- 二、研究の方法
- 三、陶淵明の隠遁
  1. なぜ陶淵明か
  2. 隠遁の原因  
不安定な時代  
大きな社会の潮流  
心の支え
  3. 隠遁生活
  4. 陶淵明の死生観
  5. 陶淵明はどうやって生活を維持したか
  6. 詩人陶淵明
- 四、西行の隠遁
  1. 隠遁の動機  
昔の説話  
近現代における西行の研究
  2. 隠遁生活
    - ①草庵生活
    - ②旅修行
  3. 隠遁生活における心の拠り所
  4. 西行と和歌
    - ①西行と桜
    - ②西行の「あくがれいづる」心
    - ③無常
    - ④もののあわれ
- 五、中国と日本における隠遁のまとめ
- 六、参考文献

## 一. 研究の動機

私が日本の隠遁思想に関心を持つきっかけとなったのは、日本の有名な文学作品『徒然草』を読んだことだ。作者である吉田兼好は隠遁し草庵で暮らした文人として知られているが、実は隠遁生活を送った人は珍しくなかった。隠遁思想は日本の思想の一部とも言える重要な位置を占めていた。また、中国にも竹林の七賢や陶淵明、謝靈運など隠遁した文人がいたため、本論文では、これら中日両国における隠遁思想には何か共通点、あるいは違いがあるかどうかを明らかにしたいと思った。

## 二. 研究の方法

まず、中国の隠遁した詩人陶淵明と日本の隠遁した歌人西行二人を例として、これまでの研究によって、二人の隠遁思想がどう説明されているかをまとめる。そして、二人の隠遁思想を比較した上で、中日両国における隠遁思想の共通点と違いを明らかにしたい。



## 三. 陶淵明の隠遁

陶淵明（325～427年）は中国の隠遁した詩人としてよく知られている。陶淵明は、義熙元年（405年）八月に、揚子江沿岸の彭沢の長官となった。しかし、十一月に四十一歳で辞任した。この間に、有名な『帰去来の辞』を書いた。それ以後、故郷で田畑を耕す生活を送り、元嘉四年（427年）、六十三歳で一生を終えた。陶淵明は『宋書』「隠逸伝」に収められ、隠遁者と扱われた。陶淵明が隠遁した理由は何か、また、どんな隠遁生活を送っていたかをまとめてみよう。

### 1. なぜ陶淵明か

陶淵明は『宋書』「隠逸伝」に記され、隠逸者として扱われる。後の『晋書』『南史』「隠逸伝」にも収められている。陶淵明は、隠遁生活を送る間に、たくさんの詩と文章を残した。その中の『五柳先生の伝』などは陶淵明の人生観が読み取れるが、作者の理想とする高潔な隠遁者の姿を描いている。陶淵明の人生観と生活態度は後世の人々に大きな影響を与えた。陶淵明を隠遁者とみなすことについては、当時から後の世ま

で認識が一致している。中国で隠遁といえば、だれしも思うのは、まず陶淵明であろう。

## 2. 隠遁の理由

### ①不安定な時代

中国では、王莽（前 45～後 23 年）が、「新」王朝（8～16 年）を建てた。天下が大きく乱れ、官僚たちは安穏な生活が送れなくなると、宮仕えを辞め、安全な場所に身を隠すようになった。それ以降、漢王朝が成立したとはいえ、政治の混乱は続く。やがて後漢の王朝（東漢）（25～220 年）は滅亡し、三国時代（魏、蜀、呉）（220～280 年）という分裂、戦乱の時代に入った。官僚たちは生命の危険にさらされて、身を隠すものが多かった。そして、八王の乱（291～306 年）が起こり、五胡の中原侵入を招くと、西晋（280～316 年）が滅亡する。さらに五胡の勢力は増大し、南にある東晋（317～419 年）を圧迫した。陶淵明の生きた時代は政局の不安定な時代であった。

### ② 大きな社会潮流

王莽の「新」王朝以降、生命の安全を守るために政治に関わる場から逃れ、身を隠すものが多く現れた。宋の『後漢書』には、「逸民列伝」の巻が設けられ、これらの人々の隠遁という行動が歴史として記されている。この隠遁という行動様式は、三国時代から晋までつづく。晋になると、隠遁は社会全体の潮流となった。

### ③ 心の支え

「この風潮（隠遁）を醸成したのは、ほかならぬ三国時代から流行した老荘思想である。」（『中国の隠遁思想』）前漢・後漢において、国を支える政治の指導原理であった儒教は、統治者を支える規律として利用された。それは統治者にとって都合のいいものであったが、政治の場から逃避し、身を隠す当時の官僚たちにとっては、心の拠り所とはならなかった。後漢の滅亡とともに、儒教思想は官僚たちの支持を得られなくなる。そのような社会状況の中で、老荘を中心とする道教の思想が隠遁した人々の間に流行した。老荘思想の精神は「人為的なことを排し、『無為自然』、『無私無欲』を目標とし、人間本来のあるがままの姿を尊重するものである。そのめざすところは自由な世界であるとみていた。」（同上）老荘の「自ら然る」考え方は隠遁する人々に強く支持された。「老荘の追及する『自然』とか『道』が、自分たちの隠れ住む環境のなかにあると悟ったとき、苦しく思われていた山野の生活も楽しく感じられるようにな

った。」(同上) 隠遁生活は苦しい生活から憧れの生活となった。厳しい生活の場であった山野は、次第に「山水」という美しいイメージに変わった。更に、晋になると、「老荘を慕いつつ山水に遊ぶことを、知識人の教養であると考えようになった。」「晋代から始まり、官僚社会を俗社会とみる。」(同上) このような時代に生きていた知識人たちは、「老荘思想に心酔し、無為自然を心がけて山水に遊ぶことを好み、仕官せず、官僚社会を世俗社会と見て見下した。」(同上) 当時の官僚たちは宮廷社会を嫌い、自分の身を潔く保つために、宮仕えを辞め、隠遁生活を始めた。隠遁は処世の道の一つとして尊ばれていたと考えられる。

### 3. 隠遁生活

このような時代風潮の中で、知識人である陶淵明は老荘思想の影響を深く受け、官僚社会を卑賤なものに見なし、宮仕えの生活から逃れたと考えられる。隠遁生活は陶淵明にとって、故郷での田園生活であった。宮廷の生活から離れて、故郷で田畑を耕しながら、自給自足の生活を送っていた。そして、隠遁する中、たくさんの有名な詩と賦を残した。この隠遁生活がなければ、こういった貴重な文学作品は生まれなかつただろう。しかし、陶淵明自身にとって、宮仕えを止めるというのは、まったく収入のない生活になることを意味した。このような生活は決して楽な生活ではなかつたと考えられる。「彼は一家を支えるためには、仕官せざるをえない現実があった。仕官は本意ではないが、といてそれを拒否して、理想とする田園生活に入るには、暮らしの貧しさがそれを許さない。仕官と隠遁の間を往きつ戻りつする心の苦悩、葛藤に、いつも苛まれていた。意を決して故郷の田園生活に隠遁したものの、なお隠遁が、果たしてとるべき道であったかどうか悩んでいた。」(『中国の隠遁思想』) こういう心の動揺があるときに、老荘思想は強い支えとなった。陶淵明は「その貧乏生活を諦観し、ときには楽しんでいくかのごとくみえる。」それは老荘思想の主張する「無私無欲」の考え方に影響されてと考えられる。「淵明は富貴を無視し、貧賤に甘んずることを、人生における最大の価値と考えているが、その生き方こそ隠者の姿であるとは見ていたのではないだろうか。」(同上) 老荘思想は陶淵明の隠遁の原因でもあれば、隠遁後の心の支えでもある。陶淵明はまずしい生活に甘んじて、隠遁生活を続けたことが理解できる。

#### 4. 陶淵明の死生観

陶淵明の生死に対する考え方は老荘思想に深く関係していると考えられる。まず、『莊子』に見られる死生観を取り上げて、莊子の死生観と陶淵明の死生観を比較してみよう。莊子は、妻が死んだとき、土瓶を叩きながら歌っていた。それを「はじめはもともと生命なんかなかったのだ。それがなにかのひょうしで形となり生まれてきて、それがまたものへ戻っただけだ。一年が春夏秋冬というふうにめぐると同じだ」と説明した。そして、莊子は自分が死ぬときに、「自分は天と地とお棺とし、日と月とを飾り玉とし、万物を葬式の道具としているのだ。」という考えを表した。

陶淵明にとって、「生死は人間の力ではいかんともしがたいという諦観が背後にある。生死の問題は、自然にゆだね天命にまかせるよりほかはない。」(『中国の隠遁思想』) 死に対してはどうしようもないと考えた。これは自然のままがいいという老荘の考え方と一致する。「陶淵明が頭に描く理想の生活は、外物に左右されず自由に歩きまわられる生活である。」(同上) 老荘思想は、宮仕えの場から離れ、故郷の田園に帰り、自然の変化のままに身を委ねて、自分の人生を送るという陶淵明の隠遁生活の選択に影響を与えたと考えられる。

#### 5. 陶淵明はどうやって生活を維持したか

仕官しない陶淵明は経済的な問題をどう解決するかについて、前回のレポートで問題になった。今回はこれまでの研究と陶淵明の作品を踏まえて、論じてみる。

陶淵明は自給自足の農村生活を呼びかけている。自分も田園へ帰って、そういう生活を送っていた。しかし、畑仕事はそう簡単ではない。「豆を種ゆ南山の下、草盛んにして豆苗稀なり」。農作物を植えても、なかなか収穫できないのが現実である。そこから、陶淵明の隠遁生活は厳しく、貧しいものであったと推測できる。

岡村繁の『陶淵明 世俗と超俗』によると、陶淵明には有力なパトロンがいる。その人は当時の尋陽における最高の権力者であり、江州刺史の王弘である。岡村繁は『宋書』隠逸伝を引用して、論じる。王弘はかねてから陶淵明と知り合いになりたいと思っていた。そして、積極的に陶淵明に接近する。陶淵明は王弘の接近に対して、隠遁者らしく無関心を一応は示しつつも、実は内心そうでもなさそうな態度をとっている。

隠遁者として、世俗とはきっぱり縁を切ったと考えられるが、実はそうでもない。隠遁生活を経済的に維持しようとするかぎり、権力者にある程度接近することは避けがたい。必然的な身の振り方である。

## 6. 詩人陶淵明

陶淵明は詩人として夥しい作品を残した。これらの作品を通して、陶淵明の隠遁生活の心情が読みとれると思う。以下で陶淵明の代表的な作品を取り上げて、論じてみよう。

### 『五柳先生の伝』

#### 原文

先生不知何許人也，亦不詳其姓字；宅边有五柳树，因以为号焉。闲静少言，不慕荣利。好读书，不求甚解；每有会意，便欣然忘食。性嗜酒，家贫，不能常得，亲旧知其如此，或置酒而招之。造饮辄尽，期在必醉。既醉而退，曾不惜情去留。环堵萧然，不蔽风日；短褐穿结，箪瓢屡空，晏如也！常著文章自娱，颇示己志。忘怀得失，以此自终。...

この作品は陶淵明の自伝である。生活の実録と言われた。梁の沈約（四四一—五一三）の『宋書』隠逸伝や、梁の昭明太子蕭統（五〇一—五三一）の『陶淵明の伝』など、いずれもその冒頭に『五柳先生の伝』に関する記述があった。

淵明、嘗て『五柳先生の伝』を著して以て自らを況う。時人これを実録という。

この作品の冒頭には「先生は何許の人なるかを知らざるなり」と書かれている。小尾郊一『中国の隠遁思想』によると、こういう書き方は、超俗的隠者に、しばしば用いられている。『南史』「隠逸伝」に、晋の太康年間の「漁父」なるものを、「姓名知らず、亦た何許の人なるかを知らず」として、世俗を超越して富貴を無視した人物としている。似ている表現で、超俗的な隠者を描いた。「五柳先生」もこういう表現で隠者の身分を著していると推測できるだろう。

こういうことから分かるのは当時この作品がただならぬ位置を占めていたことだ。そして、この作品は当時の人たちが陶淵明を研究する際重要な文献となったようだ。『五柳先生の伝』は陶淵明の自伝であり、陶淵明の生活態度や価値観を反映する作品であり、後世の人々の陶淵明像の形成に決定的な影響を与えた作品だと言われる。

この作品から見られる陶淵明の自画像は物静かで、お金や名誉に関心がなく、読書を好む。貧しい生活に超然と甘んじる、高潔な隠者である。お酒を飲むことだけが気に入っている。富貴を羨まず、貧賤に甘んじることはまさに隠者であることの証明と言えるであろう。

## 『桃花源記』

### 原文

晋太原中，武陵人，捕鱼为业，缘溪行，忘路之远近。忽逢桃花林，夹岸数百步，中无杂树，芳草鲜美，落英缤纷，渔人甚异之；复前行，欲穷其林。林尽水源，便得一山。山有小口，仿佛若有光；便舍船从口入。初极狭，才通人，复行数十步，豁然开朗。土地平旷，屋舍俨然，山有良田美池桑竹之属，阡陌交通，鸡犬相闻。其中往来种作，男女衣著，悉如外人；黄发垂髫，并怡然自乐。见渔人，乃大惊，问所从来，具答之，便要还家，设酒杀鸡作食，村中闻有此人，咸来问讯。自云先世避秦时乱，率妻子邑人，来此绝境，不复出焉；遂与外人间隔。问今是何世，乃不知有汉，无论魏、晋。此人一一为具言所闻，皆叹惋。余人各复延至其家，皆出酒食。停数日辞去，此中人语云：“不足为外人道也！”既出，得其船，便扶向路，处处志之。及郡下，诣太守说此。太守即遣人随其往，寻向所志，遂迷不复得路南阳刘子骥，高士也，闻之，欣然规往，未果，寻病终。后遂无问津者。

(鈴木虎雄 『陶淵明詩解』)

陶淵明はこの作品によって、「桃花源」という理想の世界を描いた。この世界は生活が豊かで、平和である。「土地は平かにして廣く、屋舎は巖然として、良田・美池、桑竹の属あり。……年寄り・幼子も、ともに自ら楽しめり。」人々は誰でも働き、怠る人がいない。そして、働いた後の収穫は自分のものになる自給自足の社会で、封建社会におけるような搾取はまったくない。「先世、秦の時の乱を避け」「漢の有りしことをすらしらず、無論魏・晋をや。」この世界は外の世界と離れた「絶境」である。秦・漢・魏・晋などの封建社会と対立する理想的な社会と言えるだろう。陶淵明が生きていた時代は、政情の不安定な戦乱時代である。外からは五胡の中原への侵入するなど、絶えず北の民族に脅かされている。内では八王の乱や農民の反乱によって、戦が続き、人々は明日の命さえ保証できない状態に陥った。そのような時代を背景に、陶淵明は暗い現実には不満を持ち、理想の社会に憧れていた。

## 『帰去来の辞』

### 原文

归去来兮！田园将芜胡不归？既自以心为形役，奚惆怅而独悲？悟已往之不谏，知来者之可追；实迷途其未远，觉今是而昨非。

舟遥遥以轻飏，风飘飘而吹衣。问征夫以前路，恨晨光之熹微。乃瞻衡宇，载欣载奔。童仆欢迎，稚子候门。三径就荒，松菊犹存。携幼入室，有酒盈樽。引壶觴以自酌，眇庭柯以怡颜。倚南窗以寄傲，审容膝之易安。园日涉以成趣，门虽设而常关。策扶老以流憩，时翹首而遐观。



云无心以出〔山由〕，鸟倦飞而知还。景翳翳以将入，抚孤松而盘桓。

归去来兮，请息交以绝游。世与我而相遗，复驾言兮焉求？悦亲戚之情话，乐琴书以消忧。农人告余以春兮，将有事乎西畴。或命巾车，或〔木卓〕孤舟。既窈窕以寻壑，亦崎岖而经丘。木欣欣以向荣，泉涓涓而始流。羨万物之得时，感吾生之行休。

已矣乎！寓形宇内复几时？何不委心任去留？胡为惶惶欲何之？富贵非吾愿，帝乡不可期。怀良辰以孤往，或执杖而耘耔。登东坳以舒啸，临清流而赋诗。聊乘化以归尽，乐夫天命复奚疑？

『帰去来の辞』は義熙元年（四〇五）十一月に書かれて、陶淵明が四十一歳の時に作った代表作である。『宋書』「隱逸伝」、蕭統の『陶淵明の伝』、『晋書』「隱逸伝」、『南史』「隱逸伝」など、陶淵明について書かれた伝記によると、この詩を作った直接の動機は、次のように伝えられている。

陶淵明が彭沢の長官となってしばらくたったころ、上級官庁の郡役所から監察官が巡視に派遣されてきたので、県の属僚が陶淵明に、うやうやしく正装をして出迎えるよう進言したところ、彼は嘆息して「われ、五斗米（わずかな俸給）のために、腰を折りて郷里の小人に向かうこと能わず」といい、即日、県令の印綬を解いて職を去り、そこで『帰去来の辞』を詠んでみずからの志を述べた。

しかし、実は陶淵明が自分で書いた『帰去来の辞』の序文によると、この作品を書いた動機はそのようなものではない。以下にその序文を取り上げてみよう。

私は家が貧しく、田畑の耕作だけでは十分に食っていけない。しかも幼い子供が部屋にいっぱいおり、かめには穀物のたくわえもない。だが、いったいどのようにして生活の資をかせいだらよいのか、その方法も見つからないままであった。親戚や旧友たちは、しばしば私に地方官になるようすすめてくれ、私も思いきってそうしようかと思うこともあったが、いかんせん、それをさがすにも手づるがなかった。ところが、たまたま全国各地に変乱が起こってきて、各地の軍閥たちが領民への優遇策で人気を取り始めた。そこで、叔父が私の貧窮を見かねて、仕官の世話をしてくれ、かくてしがたい県知事に採用されることとはなった。ところが、当時は動乱がまだおさまらず、遠方への赴任は気持ちがすすまなかった。幸い彭沢県は、私の家から百里ばかりの所だし、官田からのみいりは、好きな酒をつくるのに十分だ。というわけで、さっそく官職に飛びついたのであった。

しかし、ほんのしばらくで、むしろ家に恋しくなり、帰りたい気持ちが起

こってきた。なぜならば、生まれつきの気ままは、どうにも直しようがないからである。飢えと寒さは身にしみて苦しいに違いないけれども、自分の性格に逆らえば、何かにつけて苦悩の種になるだろう。考えてみれば、以前に何度か官僚生活をしたのは、みな食わんがために我とわが身をこき使ったのだ。こう思うと、げっそりとして心がいらだち、かねてからのわが本志に対して深く恥じ入るばかりであった。はじめのうちはまだ、今年を取り入れを待って、その時になったら必ずぬき足さし足で闇に紛れて逃げ出そうと待ちかまえていたが、まもなく程氏に嫁いでいた妹が武昌でなくなり、その葬式に駆けつけたい一心で、みずから辞表を出して職を去った。仲秋の八月から冬まで、在官期間は八十余日。妹の死亡という不慮のできごとを契機として本来の心のままに行動したのだ。この篇には『帰去来兮』という題名をつける。時に、きのとみの歳（義熙元年、四〇五）十一月である。

（岡村繁 『陶淵明—世俗と超俗』）

ここで陶淵明自身がいうところによれば、官僚生活を辞めるに至るまで、複雑な心情だった。自分は官職に就きたくはないけれど、一家を支えるためにそうせざるをえない。仕事をしている間も家が恋しくてたまらない。自分の愛する妹の死がきっかけになって、やっと官僚生活を辞める決心をした。

ここに書かれた二つの動機のどちらが主かという問題ではない。両方とも本当だと考えるべきだ。この序文は『帰去来の辞』を書く前に書いたとは限らない。書いたあとで、自分の考えをまとめ、『帰去来の辞』を書いた動機として付けたとも考えられる。

この作品は陶淵明が最後の宮仕えを辞め、故郷に帰る時のものである。冒頭の「田園将にあれんとす。なんぞ帰らざる」は、反語によって、自分の帰る決心を強調した。

「舟はゆらゆらとして軽く、うきあがり」「風ははたはたとして衣を吹く」。故郷へ向かい、胸は喜びにあふれる。「ようやくかぶきとやねをのぞみ」「かつはよろこびかつは奔る」。待ちきれないほど実家へ帰りたいという心情を見事に表現した。作者は子供のように無邪気になる。「童僕はよろこび迎え」「幼児は門に待つ」「三すじの小径は荒れにつけるも」「松と菊とは猶お存す」。実家に帰り、子供たちが喜んで迎えてくれるのを見て、うれしくてたまらない。暖かい雰囲気にも温もりが感じられる。「菊」と「松」は、陶淵明の高潔な気品を表していると言えるであろう。「雲は無心にしてほらを出で」「鳥は飛ぶに飽きて帰るを知る」。自然の景物と自分の志を重ね合わせて、詠んでいる。描いているのは鳥や雲だが、実は自分の本当の気持ちを表している。官職に就いたのは自分の本音ではない。飛んで、疲れている鳥みたいな自分は味気ない官吏の

生活にもうすっかり飽きたと。鳥の姿を借りて、作者自分の超然とした心を表している。

陶淵明にとって、農民は楽ではないけれど、役所で自分の本当の気持ちを隠したり、上の人に気を遣う必要はない。こういう自給自足の農耕生活は心の安らぎが得られる。

「富貴は吾が願いに非ず」「帝の郷は期すべからず」。富貴は作者の願いではない。天帝います仙郷などあてにはできない。彼の人生観を書いている。憧れるのは「よい天気誘われて一人で散歩に出かけるか、それとも杖をつき立てて草刈りしたり土寄せしよう。また、東の丘に登ってのんびりと口笛をふいたり、清らかな流れを前に詩でも読んだりしよう。」という生活である。

この作品の主題「帰りにんいざ」は二回出てくるが、そこに反映されている作者の気持ちは少し違う。一回目の「帰りにんいざ」は陶淵明が官職を辞め、故郷に帰ることを決心する宣言であり、二回目はもう宮仕えを辞め、故郷に帰ることを考えながらの、落ち着いた気持ちであろう。

### 『園田の居に帰る』

原文

其一：

少无适俗韵，性本爱丘山。  
误落尘网中，一去十三年。  
羁鸟恋旧林，池鱼思故渊。  
开荒南野际，抱拙归园田。  
方宅十馀亩，草屋八九间。

榆柳荫後檐，桃李罗堂前。  
暧暧远人村，依依墟里烟。  
狗吠深巷中，鸡鸣桑树颠。  
户庭无尘杂，虚室有馀闲。  
久在樊笼里，复得返自然。

(鈴木虎雄 『陶淵明詩解』)

この詩で、陶淵明は統治階級の社会を「網」と見なし、その中にいる自分を捕らえられた鳥、池の中の魚と見なしていた。田園へ帰ることを鳥かごから逃げることに例えた。官吏生活からの脱出をこの上なく嬉しいことと思っている。

### 『飲酒』(其の五)

原文

结庐在人境，而无车马喧。  
问君何能尔？心远地自偏。

山气日夕佳，飞鸟相与还。  
此中有真意，欲辨已忘言。

采菊东篱下，悠然见南山。

(鈴木虎雄 『陶淵明詩解』)

この作品はおよそ義熙十三年(四一七)陶淵明が五十三歳の時に書かれたものである。「廬を結んで人境にあり」。陶淵明は隠遁生活を送るために、廬を作った。俗社会の中に隠居場所を作ったのだが、訪問客の車馬の騒がしさがぜんぜんない。なぜかというと、「心が遠く世俗から離れれば、住む所も辺境になるのだ。」「東の垣根のあたりで菊を摘みつつ、ふと目をあげれば、ゆったりと大きく廬山の姿が見える。」陶淵明は菊が好きで、畑の回りにいっぱい植えている。『帰去来の辞』に言っているように、詩人は「松と菊がまだ生き残っているのを見て、心に慰めになった。」菊は詩人の高潔な人格のシンボルのような存在と言えるであろう。

最後に「此処に真の意があり、弁せんと欲してすでに言を忘れる」の二句で詩を終えている。われわれはその「真の意」を聞きたいところだが、驚いたことに詩人は忘れたと言っている。莊子は“辯也者，有不辯也，大辯不言。”(《齊物論》)「言は弁なれば及ばず」。

『莊子』には、「真の弁説は論理を振り回さないものであり、言論が分析的になればなるほど真実というものは把握できない。」という基本的認識がある。(齊物論)また、“言者所以在意也，得意而忘言”(《外物》)「言語というものは、意味を伝えるものである。その意味を会得してしまえば、言語は忘れたれる」(外物篇)という考え方を踏まえているとも言える。

陶淵明は道教の老莊思想から強く影響を受けていることがよく分かる。この「真の意」とはいったい何なのかを明らかにするために、他の作品を取り上げて、分析してみる。

陶淵明の『連雨独飲』にこういう詩句がある。

天岂去此哉，任真无所先。

「天というものもこの酔い心地からかけはなれたものではない、自分は天のそのままなるにまかせて後にもならず先にもならずにいる。」ここで、「真」を自然の原理と見なしている。

また、『勸農』に以下の詩句がある。

傲然自足，抱朴含真。

「傲然と威張りながら何不足ということを知らずにいて、天から受けた飾り気のない性質をそのままもっていた。」この「真」は遙か昔の自給自足の社会に対する憧れであ

る。

美しい山の気配、連れだって帰る飛ぶ鳥の姿は、人間の作り上げたものではなく、自然のままの姿である。

これと対して、陶淵明は仕官を辞め、まったく逆の気持ちも持っていた。以下の詩から読みとることができるであろう。

### 『飲酒』（其の四）

原文

栖栖失群鸟，日暮犹独飞。

徘徊无定止，夜夜声转悲。

厉响思清远，去来何依依。

因值孤生松，敛翮遥来归。

劲风无荣木，此荫独不衰。

托身已得所，千载不相违。

（鈴木虎雄 『陶淵明詩解』）

この詩に、陶淵明は自分を群れから離れた一羽の鳥に例えた。この孤独で、頼りのない鳥が疲れ果てたときに翼を休める所はこの荒れ野の中の本の松である。この本の松はシンボルとして陶淵明の心の支えとなっている。それは自分の故郷と考えられる。以上の二つの詩から分かるように、陶淵明は官吏を辞めるに際して、矛盾する心を持っていた。時に故郷へ帰る喜びを熱っぽい調子で語りもするが、時に自分を群から離れた鳥と見なし、寂しさも吐露する。

## 四. 西行の隠遁

西行（1118～1190年）は平安末期・鎌倉初期の歌人、僧であり、俗名は佐藤義清、法名は円位と言う。鳥羽院の下北面の武士として仕えたが、二十三歳で出家し、陸奥から中国・四国まで生涯にわたって旅をした。隠遁の歌人として自然と心境を歌った和歌が多く伝わり、多くの人に知られた。西行がなぜ隠遁したか、また、どんな隠遁生活を送っていたかをまとめてみよう。

### 1. 隠遁の動機

これについては昔から伝わる話がある。また、近現代の西行の研究者もいくつかの説を立てている。昔から伝わる話は、具体的事実の裏付けがない。しかし、

本人が直接語ったような資料はないので、そのような間接的資料は西行の隠遁の動機を考えるには貴重な資料となる。以下にまとめてみた。

### ①昔から伝わる話

- 『西行物語』による人生のはかなさが身にしみての「人生無常」説

鎌倉時代に成立した『西行物語』は、次のように伝えている。ある日「同じく北面に参り、相親しかりける佐藤左衛門憲康と、使の宣旨を給はりて、夜の間のほどに鳥羽殿よりうちつれて契るやう、「あしたは必ずことにきらめきて参り給へ」と互いに約束して別れた。しかし翌日の朝「参りざまに誘ひければ、門にひとびと多く立ち騒ぎ、内にもさまざまに泣き悲しむ声」が聞こえる。憲康がその夜のうちに死んだというのである。「十九になる妻女、八十有余なる母」らが声を惜しまず泣き悲しんでいる有様をみるにつけても「いよいよかき曇る心地して、風の前の灯火、蓮の浮葉の露、夢のうちの夢と覚えて、やがてここにて髻を切らばや」と思う。「朝に紅顔ありて世路に誇れども、暮に白骨となりて郊原に朽ちぬ」。『西行物語』は、西行が憲康の突然の死に出逢って、「世のはかなきこと」を感じ、それをきっかけに隠遁の決意を固めたと言っている。

- 『源平盛衰記』による「恋ゆゑ」説

西行は激しく、辛い恋の思いをみずから断ち切ろうとして、隠遁の道を選んだとある。『源平盛衰記』は、次のように伝えている。「さて西行発心のおこりを尋ねれば、源は恋ゆゑとぞ承る。申すも恐れある上臆女房を思ひ懸けまらせたりけるを、「阿漕の浦ぞ」といふ仰せを蒙りて思ひきり、官位は春の夜見はてぬ夢と思ひ（略）」西行の隠遁の動機は「恋ゆゑ」であると『源平盛衰記』は語る。

とにかくに 厭はまほしき 世なれども 君が住むにもひかれぬるかな（山家集・一三四八）

何事に つけてか世をば 厭はまし うかりし人ぞ 今日ほうれしき（山家集・一三四九）

この厭わしい世から逃れたいが、恋しい「君」がいるから、捨てきれない。自分が出家を決意できたのは、恋しい「君」のためであると西行は語っている。この歌から、西行の出家を失恋ゆえとする説が読みとるであろう。「しかし、『源平盛衰記』が語っている西行の恋は、直接、具体的事実として裏付けとなるような和歌は見出せない。史実の位置における確度はきわめて低い。」

（『隠遁の思想—西行をめぐる』）

## ②近現代の西行の研究者による研究

### ● 凡卑な出自と優れた才能の矛盾

佐藤正英氏の『隠遁の思想—西行をめぐる』では、西行が凡卑な出身であるために宮廷で疎外される現実と自分の才能との矛盾に苦しみ、その宮廷の枠組みから出て、自由な身になろうと隠遁したと書かれている。「西行の門流は「重代の武士」(『台記』)として名族豪富を誇っていた。しかし所詮土着の凡卑な武士であり、随身の家柄でしかない。」西行は下北面だから、六位に相当する。「隨身階級にとっては、五位は一生をかけて手に入れる位階であって、(略)この六位か五位かの違いは、宮中では絶対的の意味を持つ。(略)だから西行が六位であったことは、宮中における無資格者であったことを意味する。」(風巻景次郎『西行』)「在俗時の西行は律令体制における最下級の官人として辛うじて宮廷社会につながっているにすぎなかった。」しかし、それは「官人貴族を中心に形成されている宮廷社会では周辺的存在でしかなかった。」西行は下北面として「宮廷社会における主要な権力者のひとびとと面識をもち、交渉ができたとしても、宮廷社会は西行にとって手の届く物ではなかった。西行は宮廷社会から疎外される場にいた。」現実に宮廷社会に身を置きながらも、心理的にはずいぶん疎外され、貴族世界と離れている。」(『隠遁の思想—西行をめぐる』)一方では、「若き西行は人目を惹かずにはおかない華々しい才能の故に官人貴族や女房にもてはやされたであろう。そのことはかえって西行の宮廷社会から疎外感を強める結果をもたらした。」出家する前の西行は、外見もよく、武道にも優れ、「生得の歌人」として歌を詠み、文武を兼ね備えた才能あふれる人物であった。しかし、「宮廷社会での位置は出自によって規定されている。西行自身の才能や栄達の努力の如何の関わりどころではない。西行にとっては自己の可能性を限界づけている壁であった。」宮廷社会での西行の位置付けは、彼が持つ才能や彼自身の努力で決まるのではなく、どここの出であるかによって規定された。西行自身の能力ではなく宮廷社会の秩序で定められていたのである。宮廷社会では、身分の低い階層の一員である隨身とみなされ、小さな役割を担う立場でしかなかった。

屏風の絵を人々によみけるに、春の宮人群れて花見ける所に、よしなる人の見やりて立てりけるを

木のもとに 見る人しげし 桜花 よそにながめて 香をば惜しまん (山家集・九十五)

桜の木の下は東宮にお仕えする人々がいっぱい群がってその美しい色を賞美している。「よそなる人」の自分は、よそながら桜をながめ、せめてその香をめでようと西行は自分の「よそなる人」の立場をはっきり自覚している。

西行は、自己の在りようがこの社会において定められ、自己の有限性を規定されていると感じただろう。これは西行にとって自己の可能性を限界づける壁になり、西行を苦しめていたに違いない。

『台記』の記録には、西行が内大臣の藤原頼長に一品経を行うことを頼んだことが記されている。

「隠遁者は宮廷社会においてはいわば格外者である。格外者であるが故の、一定の自在さが隠遁者としての西行にはある。隠遁者でなかったならば、内大臣に直接面会することなど凡卑な身には考えられないことであった。」(『隠遁の思想－西行をめぐる』) 隠遁したからこそ、宮廷社会の階級から自由になり、対等の人間として宮廷の官僚と接することができる。それは、西行にとって精神的に楽だったであろう。これが現実にも身を置く世界からの離脱、つまり隠遁への思いを引き起こしたと考えられる。

### ● 眉目秀麗な青年への「恋」

佐藤正英氏の『隠遁の思想－西行をめぐる』では、「西行の隠遁の動機は「恋ゆゑ」であったが、高貴な上臈女房への恋ではなく、眉目秀麗な憲康への恋であったと思われる。」と書かれている。「恋が絶対願望となったとき、恋は眉目秀麗な青年といった直接の対象をつきぬける。恋は直接さを失い、観念に彩られる。(略) 西行の内にそれと気づかないままに絶対願望と化した恋がわだかまっていたのであろう。憲康の急死は絶対願望を一挙に噴出させたのであろう。」憲康は西行の同僚として、また二歳年上の親族としての存在であったので、ここの「恋」の理解と『源平盛衰記』に出る上臈女房への「恋」とは違う意味ではないかと思う。「一緒に生活できない人や亡くなった人に強くひかれて、切なく思うこと。」という意味の「恋」と理解したほうが相応しいだろうと思う。

## 2. 西行の隠遁生活

### ● 草庵生活

西行にとって、草庵生活は隠遁生活の中の重要な部分を占めていた。

いにしへ頃、東山に阿弥陀房と申しける上人の庵室にまかりて見けるに、なにとなくあはれにおぼえて詠める 柴の庵と 聞くはくやしき 名なれども 世に好もしき 住居なりけり  
(山家集・七二五)

柴の庵と聞くと、いかにも粗末な所だと思っていたが、実際行ってみると、好ましい住居であった。草庵は俗の世界の仮の住まいと対比になって、粗末な草庵のほうがいいと西行は思っている。「西行は隠遁後まもなく、嵯峨法輪寺の草庵に身を置いている。」(『隠遁の思想－西行をめぐる』) いったいどんな所を草庵にしたのかは興味深い。

嵯峨に住みける頃、隣の坊に申すべきことありて、まかりけるに、道もなく葎の茂りければ  
たちよりて 隣とふべき 垣に添ひて ひまなく這へる 八重葎かな (山家集・四七一)



草庵と草庵の間に八重葎が通り抜けられないほど茂っている。寂しく、荒れた草庵の様子が窺える。

「草庵は孤立してあるのではなく、集落を形作っていた。集落を形成していても隠遁者はそれぞれに孤絶している。秋になると、草庵は丈高く茂った八重葎に覆われて、少し隔たったところにある隣の草庵への道も埋もれてしまう。」(同上)



もろともに 影を並ぶる 人もあれや 月の洩りくる 笹の庵に (山家集・三六九)

夜になると、この粗末な草庵に月の光が差し込む。月の光は美しいのだが、独りで見るのはやはり寂しいものだ。一緒に月を見る人が側にいてほしい。「さびしさにたへたる人のまたもあれな庵並べん冬の山里」「山里にうき世いとほん人もがなきうやしく過ぎし昔語らん」と同じく、独りの草庵生活の寂しさを語っている。

草庵の生活は厳しく、辛く、寂しいものだったと考えられる。

春のほどは わが住む庵の 友になりて 古巢な出でそ谷の鶯 (山家集・二十九)

鶯に春の間は自分が住んでいる庵の友となって、古巢をでて里へ都へと移っていたりしないでほしいと願い、寂しい草庵生活に友達がほしいと詠んだ。

庵にもる 月の影こそ さびしけれ 山田は引板の 音ばかりして (山家集・三〇三)

山里のひとり住みの草庵では、耳にする音は山田の引板の音ばかりであり、目にするのは、草庵の隙間から洩れこんでくる月の光である。草庵生活の寂しさが窺える。

閑待月

月ならで さし入る影の なきままに 暮るるうれしき秋の山里 (山家集・三一八)

月以外には山里の草庵を訪れるものがない。月の光がさし入るだろうと、日の暮れるのがうれしく思われる。なんと寂しい草庵生活であろうか。

いづくとて あはれならずは なけれども 荒れたる宿ぞ 月はさびしき (山家集・三四〇)

蓬わけて 荒れたる庭の 月見れば 昔すみけん 人ぞ恋しき (山家集・三四一)

身にしみて あはれ知らず 風よりも 月にぞ秋の 色はありける (山家集・三四二)  
虫の音に かれゆく野辺の 草むらに あはれをそへてすめるつきかげ (山家集・三四三)  
木の間洩る 有明の月を ながむれば 寂しさそふる峯の松風 (山家集・三四五)

荒れ果てた、都を遠く離れた寂しい草庵で、月を眺め、月の「あはれ」を詠んでいる。草庵のまわりは雑草の蓬がいっぱいで、荒れ果てた様子が窺える。夜響いてくる峯の松風はいつそうこの寂しさをつのらせる。

「隠遁したばかりのころは、訪れてくるひとも多く、煩わしかったが、ひとびとの訪れもいつか間遠になった。心をうちあけて語ることのできる相手がほしいと思った。」「冬が長く感じられ、春の来るのが待ち遠しい。」(『隠遁の思想—西行をめぐる』)

西行は一つの草庵に止まって、一生を送ったことはなかった。

鶯は 谷の古巢を出でぬとも わがゆくへをば わすれざらん (山家集・二十八)

鶯は谷を巢とし、春と共に谷から里、里から都へと移る。西行は鶯の巢に近い山里に住むものとして独自の境地を詠んだ。西行は鶯と同じく辺境世界へ旅に出て、一所不定の漂泊の隠遁生活を送っていた。「西行は嵯峨や東山、鞍馬の奥、さらには大原など、草庵から草庵へと流離していった。」(同上) 常に場所を変えて、異なる草庵に身を置くことは西行の草庵生活の特徴と言えるだろう。

## ● 旅

西行は陸奥から中国・四国まで生涯にわたって旅がよくした。二十代後半に陸奥へ、また、六十九歳で二度目の陸奥へ旅した。旅は草庵生活とともに、隠遁生活のもう一つの重要な部分である。西行はなぜ絶えず旅に出たのか。「冬が巡ってきて一年が過ぎた。二年三年が経つのは早かった。草庵での生活ももの珍しさを失った。草庵での日々もいつか在俗の頃と変わらない常凡な日常となっていた。」「西行は隠遁しても世俗と無縁になったわけではない。在俗時に比べ、かえってかわりを深めているといってもよい。勸進、陳情、造営管理などで頻繁に権力者層と接している。草庵に隠れ住む存在でありながら、これでは都にいるのと変わらないと西行は思う。」(『隠遁の思想 西行をめぐる』) 時間が過ぎていくうちに、世俗からの離脱で始まった草庵での日々も、日常的な営みになっていくと西行は気づく。西行は旅に出ることによって、隠遁を本来の、日常生活とは違う生活のありように戻そうとしたのだろう。

## ● 修行

西行は大峰へ修行の旅をしたことも知られている。大峰での修行は厳しい苦行であった。大峰入りには「木をこり、水を汲み……日食少しきにして……重き荷をかけて、峻しき峰を越え、深き谷をわくる」苦行を伴った。(『古今著聞集』) 大峰での修行は「通常の隠遁者には思いもよらないことであった。」西行ははじめ苦行の厳しさに涙を流したが、苦行の謂われ「……身を苦しめて、木をこり、水を汲み、あるいは勘発の言葉を聞き、(略) これ即ち地獄の苦を償ふなり。(略) 早く無垢無悩の宝土に移る心なり」を聞いて、少しもたじろぐことなく、よく苦行に堪え、修行したようだ。こういうことから、西行の隠遁生活には仏教の教えが関わっていたと考えられる。

### 3. 隠遁生活における心の拠り所

西行は厳しく、寂しい草庵生活に甘んじて、普通の人には耐えられないほど厳しい大峰の苦行に従い、山伏の修行をやり遂げたが、これは何か信念が西行の心にあったからだと考えられる。この「信念」は、「心の支え」、「拠り所」と言い換える事が出来ようが、これはすでに、佐藤正英の『隠遁の思想—西行をめぐる』に詳しく論じられている。ここでその研究を見てみよう。

『隠遁の思想—西行をめぐる』には「原郷世界」という概念が出てくる。「隠遁とは世俗世界を離脱して辺境に赴くことであった。そして、その背後にはもう一つの世界の存立が予感されていた。原郷世界である。原郷世界とは、人々が本来そこに在るべきはずの世界であり、自己の生の拠り所とは何かの問いに対する答えとして存立した。隠遁とはまさに、その原郷世界を目指すことに他ならなかったのだ。」「原郷世界はひとびとが本来そこに在るべきはずの世界である。」「ひとびとにとっての本来の家郷、つまり原郷である。」「原郷世界は隠遁者自身の観念においてのみ存立する。」原郷世界は人々の観念にある世界で、自分にとって、少しも「間然する」ところがなく、理想的で、完全な世界である。西行にはこの理想的な「原郷世界」の観念が宿っていたと考えられる。彼方にある「原郷世界」を追いかけ、憧れることは西行に隠遁生活の寂しさや厳しい苦行を忘れさせる。

「隠遁は世俗世界からの離脱である。古代や中世のひとびとにとって世俗世界は律令体制内世界を意味していた。律令体制内世界の外部にある世界に出ていこうとすることである。」「律令体制内世界の外部に在る世界は、(略) 律令体制内世界の周辺に位置している辺境世界である。」「隠遁者は辺境世界へ出ていくことによって世俗世界を離脱しようとする。」西行にとってこの辺境世界は「草庵」であったり、都を離れたあちらこちらの「旅先」であったり、修行する人気のない山奥であると考えられる。

西行がどこの草庵に身を置いても、雑務は追いかけてくる。草庵での日々は日常と化す。西行はどの草庵にも安住することができない。そして、どの草庵も仮りの住まいではないかとの思いが宿る。これは西行が草庵から草庵へ流離する原因のひとつと考えられる。また、いつの間にか世俗世界に舞い戻ってしまっている自分に気づく。このままでは隠遁したことが無意味になってしまう。

世を捨てた時のあの心に立ち戻り、世俗世界から離れようと心を決める。そして、辺境世界を目指して旅に出る。

#### 4. 西行と和歌

西行にとって和歌が「原郷世界」へ近づくための媒介であった。「西行は、和歌を通じてしか自己の思想を語らなかつた。」「西行においては、和歌を詠むことは、隠遁者であろうとすることにつながっていた。和歌を詠むことと隠遁者であることが重なっていたのである。」西行にとって和歌の意味は、修行における一時の息抜きではなく、「観念の内なる情景を読むことによって原郷世界に到達しようとするのである。」西行の和歌の二大素材が春の桜と秋の月であることは先人の研究によって知られている。窪田章一郎の『西行の研究』によれば、西行の和歌の中で最も頻度の高いのは桜の花である。そして、秋の月は西行の和歌において桜の花と並ぶ主題である。西行は桜と月など観念世界の情景を詠むことで原郷世界に少しでも近づこうとする。また、自分が原郷世界にいることを和歌を詠むことによって証明している。

##### ①西行と桜

「日本人と桜ということですぐ思い出されるのは、西行である。かれは一生のあいだ、桜をうたいつづけてうむことがなかつた。なかでも、吉野の桜を歌った歌はよく知られている。」(『日本人の心情』)

『山家集』の桜歌群春部には 173 首中 103 首もの桜の歌があることは、いかに西行が桜を愛したかを示す。

願はくは 花のしたにて 春死なん そのきさらぎの 望月の頃 (山家集・七十七)  
仏には 桜の花を たてまつれ わが後の世を 人とぶらはば (山家集・七十八)

西行は釈迦が入滅なさった二月十五日頃に春の桜の花の下で死にたいと言っていた。そして、藤原俊成の『長秋詠藻』によると、西行はこの歌の願い通り、文治六年(1190)二月十六日に寂したそうである。その歌と死は、『秋篠月清集』(九条良経)・『拾玉集』(慈円)・『拾遺愚草』(藤原定家)等にも取り上げられ、いかに当時の人々を感動させたかが知られる。自分の死後、後世弔ってくれる人があるならば、自分の最も愛する花である桜を供花として供えてほしいと西行は言っていた。西行の桜に対する特別な感情と道心が表されている。

世を遁れて東山に侍りける頃、白川の花ざかりに人さそひければ、まかりて、帰りて昔思ひ出でて散るを見で 帰る心や 桜花 昔にかはる しるしなるらん (山家集・一〇四)

昔は桜の花を見にいくと、散るのを見ないで帰ってしまったが、出家隠遁して淡々たる心境となった今は、散るのを見てから、帰るようになった。そういう桜の花に対する心の心境の変化は、隠遁して心の在りようが在俗の昔の有りようと変わってしまったことの証拠であろうと西行は気づいた。隠遁すること自体が確かに西行に大きな影響を与えたと考えられる。

もろともに われをも具して 散りね花 憂き世をいとふ 心ある身ぞ (山家集・一一八)

思へただ 花の散りなん 木のもとに 何をかげにて わが身住みなん (山家集・一一九)

惜しめども 思ひげもなく あだに散る 花は心ぞ かしこかりける (山家集・一二一)

西行の桜に対する感情はきわめて矛盾しているように見える。時には桜が散った後なにも頼りにできるものがなくなるのを惜しんで、散らないでほしいと望んでいる。また、桜の花が散るのはこの憂き世にいつまでもさらされたくないからであり、はかなく散ってゆく花の心は、賢いと思い、自分もこの憂き世をいとう心を持ち、桜の花と共に、散ってゆきたいと詠んだ。

以上の例からわかるように、西行といえば桜というほど、西行は桜を数多く詠んでいる。

## ②西行の「あくがれいづる心」

「西行は桜の花を見ているうちに、自分の心がいわかに騒ぎ出し、感情が激してきて、ついにその心が自分のからだから花の方へと抜けていく感じにとらえられる。心と身が乖離する不安定な状態をかれは繰り返したっている。」(『日本人の心情』)「心は花や月に憧れ、身体から離れて、出ていく」という。西行は月や桜を見て、よく心が体から離れて、美しい月や桜に憧れると詠んでいる。目崎徳衛氏の『出家遁世』によると、西行は数奇の心を持っている。

吉野山 こずゑの花を 見し日より 心は身にも そはずなりにき (山家集・六十六)

桜の花のため身に添わなくなった心の歌である。昔の人は靈魂は肉体より遊離して「あくがれいづるもの」と考えた。「もの思へば沢の螢もわが身よりあくがれいづる魂かとぞ見る」(『後拾遺集』雑六神祇、和泉式部)。

うちつけに また来ん秋の 今宵まで 月ゆゑ惜しく なる命かな (山家集・三三三)

西行は月ゆゑにこそ「惜しくなる命かな」と詠んでいる。月に憧れる心があるままに見てとることができる。

暁落葉

木の葉散れば 月に心ぞ あらはるる み山隠れに 住まんと思ふに (山家集・四九五)

月に憧れる心とものあわれを語る歌。落葉前は月の光の洩れてくることも少なかったが、落葉した後のこの時、月の光は大いに差し込み、秋同様に月に心が憧れ出る心境を詠んだ。

月を見て 心うかれし いにしへの 秋にもさらに めぐりあひぬる (山家集・三四九)

西行は月を見ていると、心が身を離れ、月に憧れ、魂が美しい月に向かって身から抜け出ていくように感じる。「心うかれし」は西行がよく用いていた語である。

うかれ出づる 心は身にも かなはねば いかなりとても いかにかはせん (山家集・九一二)

西行は絶えず花や月に「あくがれいづる心」を持っている。しかし、身から抜け出てゆく心は、出家し仏道に志す身の自由にはならないので、どのようになろうとも致し方のないと西行は語っている。

花を見る 心はよそに 隔たりて 身につきたるは 君がおもかげ (山家集・五九八)

桜の花に心あこがれる西行の心境を詠んだ歌である。桜をめぐる心は身から抜け出て、どこか別の所へ行ってしまい、その代わりに自分の身につけているのは、恋しい人の面影だけである。

『日本国語大辞典』では、「数奇」を①物事を愛好する心持ち。すきこのむこと。②風流、風雅の路に深く心を寄せること。風流の物好み。③風流、風雅の道。和歌、茶の湯など。④恋愛の情趣を好むこと。⑤自分の思うままにふるまうこと。また、そのさま。⑥物好きなこと。また、そのさま。と説明しているが、西行の数奇の心は①から③までの意味に近いと思う。月や桜を愛し、それに寄せる風流心である。

### ③無常

西行の隠遁は無常と深く関係している。西行の作品には必ず無常がある。西行の生きていたころは、浄土宗、禅宗などの新しい宗教が出てきたので、無常観が激しく燃え上がっていた。西行の隠遁の一つの原因とも言える。

なにごとも 変わりのみゆく 世の中に 同じ影にて すめる月かな (山家集・三五〇)

西行の生きていた時代は「なにごとも変わりゆくのみ」という諸行無常の世である。それは「ありしにもあらずなり行く世の中に変わらぬものは秋の夜の月」(『詞花集』)にも見られる。

あはれ知る 涙の露ぞ こぼれける 草の庵を むすぶ契りは (山家集・九一一)

草庵を結んで、世間から隠れる決意をしているが、世の無常を知り涙がこぼれた。この歌からも、無常感は隠遁の前提となっていると言えるだろう。

亡き人も あるを思ふも 世の中は ねぶりのうちの 夢とこそ見れ (山家集・七六〇)  
越えぬれば またもこの世に 帰りこぬ 死出の山こそ 悲しかりけれ (山家集・七六三)  
はかなしや あだに命の 露消えて 野辺にわが身や 送り置くらん (山家集・七六四)  
秋の色は 枯野ながらも あるものを 世のはかなさや 浅茅生の露 (山家集・七六七)  
年月を いかでわが身に おくりけん 昨日の人も 今日はない世に (山家集・七六八)

以上の歌で無常を詠んでる。人間はいつか死ぬものである。命ははかない露にたとえられる。今はなき人もかつてはこの世にいたことを思うにつけ、世の中は夢のようにはかないものと思われる。

諸行無常の心を

はかなくて 過ぎにし方を 思ふにも 今もさこそは 朝顔の露 (山家集・七七七)

人生はあたかも朝顔につく露があつという間に消えてしまうようにはかないと説く。

さだめなし 風かづらはぬ 折だにも また来んことを たのむべき世か (山家集・九二四)  
風邪を患っていない時でさえも、無常のこの世は確かなものではない。まして風邪を患っている今は、いっそう頼りない。

あだに散る 木の葉につけて 思ふかな 風さそふめる 露の命を (山家集・九二五)

風邪を引いて、命は風にさそわれてはかなく散る木の葉や同じように風が誘って散らす露のごとく、はかなくなった。

#### ④もののあわれ

西行は歌の中で、よく「もののあわれ」が歌われている。

月前萩

月すむと 萩植ゑざらん 宿ならば あはれすくなき 秋にやあらまし (山家集・三八七)

月前鹿

たぶひなき 心地こそすれ 秋の夜の 月すむ峯の 小牡鹿の声 (山家集・三九七)

荻は秋の風に吹かれて、葉ずれの音がする。秋の夜の月の澄みわたる峯に泣く小牡鹿の声も耳にする。そういった音は一層寂しく、草庵から洩れ見える月のあわれを感じさせる。

山家冬月

冬枯れの すさまじげなる 山里に 月のすむこそ あはれなりけれ (山家集・五一七)

何もかもすっかり枯れはてて、寂しい山里に月のみが澄んだ光を落としている。こういう光景は西行にひどくもののあわれを感じさせる。

雪歌よみけるに

なにとなく 暮れるるしづりの 音までも 雪かはれなる 深草の里 (山家集・五三八)

「深草の里」は秋の鶉で有名な歌枕で、物寂しい里のイメージがある。冬の夕暮になって、枝から雪が落ちると、その音が一層あわれ深く感じられる。

「もののあわれ」という言葉にはいろいろな意味が含まれている。『日本国語大辞典』は「もののあわれ」を①一の心を、同情をもって十分に理解できること ②物事にふれて起こるしみじみとした回顧の感慨 ③物事や季節などによって呼び起こされる、しみじみとした情趣 ④何かに深く感動することのできる感じやすい心 ⑤悲哀や同情を感じさせるような気の毒なさま、と説いている。こういう解釈から分かるように、「もののあわれ」というのは必ずしも悲しい感情ではない。この気持ちには政治的な判断や何かの道理のような意味合いなどは混ざっていない、物事に対して「すばらしい」とか「きれい」と感じる心である。「『理』よりも『事』を、目にふれ、耳にひびく眼前即近の事物を大切に、それをつくづくと認め、わきまえることが、いまにいたるまで日本人の特色を成している。」(『日本人の心の歴史』唐木順三)。西行の歌は何かの「理」を表すのではなく、自分が見て、感じていることをそのまま表現する。中村元氏は、「普遍を無視して、具象的直観的な個物を強調しようとする態度」は凡そ日本人に共通する態度であると言う。つまり、具体的なものはなければならない。その「もののあわれ」を感じさせる対象は桜の花であったり、月であったり、露であったりする。桜の花は咲いている間はものすごくきれいだ、あつという間に散ってしまう。月はいつも満月ではなく、常に変化するもののシンボルである。露も短い時間で、なくなってしまう。これらのものの共通点といえば、絶えず変化しているという点である。

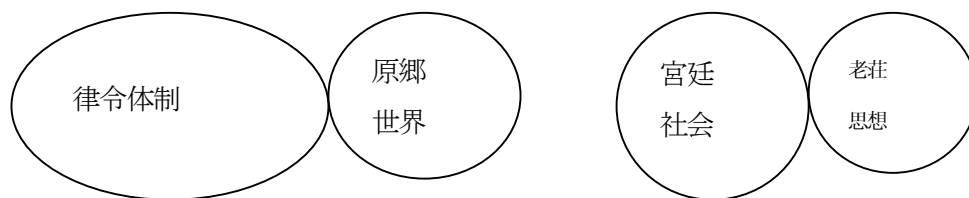


## 五. まとめ

陶淵明（325～427 年）と西行（1118～1190 年）は生きた時代に 800 年ぐらいの隔たりがあり、二人の隠遁には因果関係はほとんどない。西行は陶淵明から何も影響を受けていない。だが、二人の隠遁を比べてみると、似ている点もある。そして、陶淵明と西行との対比の中で見えてくる中日両国における隠遁思想の似ているところと違うところをまとめてみた。

### ◆ 類似点

- 寂しく、苦しい隠遁生活には精神的な支えとなるものがある。中国の隠遁者の場合は老荘思想が支えとなり、日本の場合は「原郷世界」のような理想的な観念世界の存在が考えられる。
- 隠遁者たちが自分の捨ててきた場所を「俗の世界」と見なすことには、仏教の影響があると考えられる。（その「俗の世界」は、中国においては宮廷社会で、日本においては律令体制の世界と考えられる）以下、図式で簡単にまとめた。



- 隠遁と言っても、ずっと一人で辺境に暮らしているわけでもない。世俗とのつながりは持っていた。陶淵明の場合は当時の権力者に「知己」がいた。西行も勸進などでよく上層階級の人と会ったりした。
- 何か具体物によって、自分の気持ちを表すところは、陶淵明と西行では同じと言えるだろう。陶淵明は、菊や松などによって、暗い官吏生活をきっぱりと辞め、高潔で、超然とした志をもって生きる決意を表した。西行は桜や月を詠んで、「もののあわれ」を表現した。
- 隠遁するとき、心に迷いがある。寂しく、厳しい隠遁生活はそう簡単にできるわけではない。西行は草庵に身を置いていても、時々都の事を思い出して、懐かしむ。すると、そういう迷いのある自分が嫌になり、自分を責める。陶淵明の場合は、官吏生活から抜け出ることをうれしく、楽しみに思うが、時には、自分を寂しく、群から離れた鳥とたとえ、かわいそうに思う。

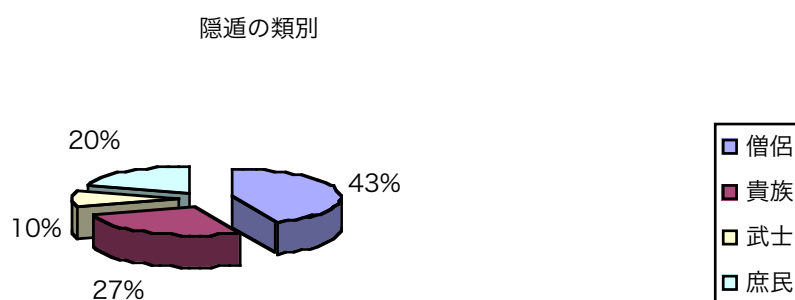
### ◆ 中日の特徴

日本における隠遁は仏教と深い関係のあることが分かった。

- 隠遁者を分類してみると、僧侶からの隠遁者が圧倒的に多い。

これまでの研究によると、日本の隠遁者には、僧出身の隠遁者が一番多い。隠遁生活は寂しく、厳しい生活環境であることはいうまでもない。隠遁を決心するひとには心の強い人間しかいない。僧は一度世間を離れた人間であるから、厳しい修行にも堪えた、かなり強い心の持ち主と言えるだろう。こういう所からもなぜ僧出身の隠遁者が多いかが窺える。

石田吉貞『隠者の文学』によると、日本における隠遁の分類（三十人）は以下の通りである。僧侶（十三） 貴族（八） 武士（三） 庶民（六）（『撰集抄』の巻首から、順に三十例）



- 隠遁者は隠遁した後、修行や勧進など仏教に関する活動をつづけた。
- 仏教の無常観は隠遁者に大きな影響を与えた。
- 日本における隠遁は個人の問題で、政治とあまり関係がないが、日本における隠遁の一つの特徴は「王法仏法不二」への批判である。日本の仏教ははやくから官寺仏教として発展したが、王朝国家体制の発達にともない、権門勢家に庇護を仰ぐ権門仏教と化した。そのため俗化した教団・寺院を嫌い、そこを離れて、再出家しようとする隠遁者が出てくる。「我が国の隠遁は『王法』や『仏法』に対して、否定的には働きかけるのであり、それらの『不二』の関係へくさびをうちこんだのであった。」（桜井好朗『閑居と漂泊—隠遁の文化的構造』）

#### ◆ 中国における隠遁

- 中国における隠遁者は「仕官」するかどうかという問題と深く関係していた。
- 隠遁者の分類からみると、隠遁というものは、一般の庶民にほとんど関係ない。官僚からの隠遁者ばかりだ。（その「官僚」の意味するものは、『中国の隠遁思想』の

研究を引用すると、士大夫階級、読書人階級といった知識階級である。)

- 陶淵明の隠遁は政治に深く関係している。仕官するかどうかを迷い、往きつ戻りつする状態であった。それは陶淵明一人の特徴ではなく、中国における大多数の隠遁者の隠遁は政治に関係している。「賢者が世に処する場合、天下が乱れておれば隠棲し、よく治まっておれば仕官するとのことである。」というのは中国では古代から読書人に共通の認識といえる。隠遁は処世の道の一つとして尊ばれていた。読書人たちは自分の考えが全うできない、世の中の考えと合わないときに、隠遁という道を選んだ。政治や社会へ直接的な批判もする。

今回のレポートで、中国と日本における隠遁について論じてきた。陶淵明と西行を二人しか例として取り上げたが、中日両国における隠遁が少しわかるようになった。そして、違いからわかるように、隠遁は中日両国の異なる文化や歴史の背景と深く関係している。中日両国は一衣帯水の隣邦であり、昔から文化などの交流が続いてきた。今回のレポートを書いているうちに、いろいろな資料に触れることができ、中日両国における文化は似ているところが多いのがつくづく思うようになった。これからも自分の関心のあるところをみつけて、研究していきたいと思う。

#### 参考文献

- 佐藤正英 『隠遁の思想－西行をめぐる』 ちくま学芸文庫 2001  
小尾郊一 『中国の隠遁思想』 中公新書 1988  
石田吉貞 『隠者の文学』 講談社学術文庫 2001  
岡村繁 『陶淵明－世俗と超俗』 NHKブックス 1976  
鈴木虎雄 『陶淵明詩解』 東洋文庫 1991  
山折哲雄 『日本人の心情』 NHKブックス 1982  
唐木順三 『日本人の心の歴史』(上・下) 筑摩叢書 1983